

日本体育学会体育史専門分科会

【秋の研究集会プログラム及び発表抄録】

平成 23 年 9 月 24 日（土）鹿屋市：ホテルさつき苑

受付 14:00～

（研究発表 1）

14:30～16:00 竹下幸佑 （筑波大学大学院）

「幕末から大正期までの鹿児島における近代体育の導入・展開と
剣術の継承」

座長：新井 博 先生

（研究発表 2）

16:15～17:45 木下秀明 「『マスゲーム』の導入とその後」

座長：大久保英哲先生

懇親会 18:00～20:00

幕末から大正期までの鹿児島における近代体育の導入・展開と剣術の継承

竹下 幸佑 (筑波大学大学院)

はじめに

大正期の鹿児島県における小学校では、在来剣術¹が教育の中に位置付けていた。この剣術は課外において行われていたものの、当時山下尋常小学校（現在の鹿児島市立山下小学校）を視察した長崎県及び三重県の視察員によって、特徴的な教育方法としてそれぞれの視察復命書²の中で紹介されている³。では、なぜ在来剣術が大正期に県内の小学校で行われていたのか。この歴史的背景を藩政期の郷中教育⁴とその伝統を受け継いで明治期に創設された学舎に着目しながら明らかにすることが本研究の主題である。同時に、近代体育の導入・展開についても明らかにする。なぜなら、在来剣術は幕末期における洋式砲術及び調練の導入を始めとする強兵策、明治期以降の近代教育制度において軍事及び教育目的で位置付けていたからである。

なお、鹿児島において竹刀・防具を用いず稽古を行う示現流や野太刀自顕流等の在来剣術のみならず、これらを用いた直心影流も行われていたことは予め指摘しておく。特に、明治30年代以降、県内の旧制中学において行われていた撃剣はこの流れを汲むものと思われる⁵。

1. 幕末期の鹿児島藩における剣術の重視

天保13（1842）年、27代当主島津斉興は外圧に対応するため、オランダ式砲術及び調練を採用した。同年、斉興は実戦的な剣術として野太刀自顕流を藩の剣術師範に採用している。当時、野太刀自顕流は藩に認められた公的な流派ではなかったものの、その実戦性が注目され、藩主の見分を経て藩の剣術師範に採用されることとなった。また、島津斉興は嘉永元（1848）年には、それまで藩の剣術師範として教育的役割を担ってきた示現流を「御流儀」へと格上げし、鹿児島藩の中での確固たる地位を与えた。

このほぼ同時期である天保13（1842）年から弘化5（1848）年の間、上級武士である鎌田正純は組頭⁶という職分を通して当時乱れていた郷中の土風を矯正するために積極的に郷中の活動に関わっていた⁷。この活動の中で、土風矯正の手段として示現流による稽古の出席点検がとられていた。ただし、安藤氏が指摘するように、これが必ずしも全ての組頭の活動だと敷衍して理解することはできない⁸。というのも、この後、斉彬が藩主として初めて郷中に介入するが、それが土風矯正目的であったからである。嘉永4（1851）年に島津斉彬が28代当主に襲封すると郷中における剣術は改めて教育的価値が加味された。斉彬は、藩内で特に土風の乱れていた郷中を武芸（剣術）によって矯正しようとしていたのである。

2. 明治期の鹿児島藩・県における剣術の継承

明治4（1871）年1月に29代当主島津忠義によって、近代的な鉄砲が盛んな時代であっても、実戦において剣術は重要であるので、修練に励まなければならないという旨の布達が出されている⁹。つまり、忠義は洋式の砲術が盛んな時代における剣術の退廃を危惧していたのである。これは軍事的な意味合いで出された布達ではあるものの、在来剣術の継承という面で重要な意味を有していたといえる。この明治4年1月は、鹿児島藩において藩校造士館が本学校へと改められ、

近代教育制度が独自に構築された時期である。同年 11 月以降鹿児島県では広く体操が行われるようになるが、同時に在来剣術も近代教育の中で行われていた。本学校附属小学校においては、撃剣と共に示現流が行われていたことが判明する¹⁰。この撃剣とは、すでに藩校創設以来剣術師範を務めていた直心影流のことだと考えられる。

この後、明治 14 (1881) 年 9 月から明治 17 (1884) 年 12 月までの間に存在した中等教育機関である鹿児島学校の規則において剣術が確認できる¹¹。これ以降、明治期の学校教育においていつまで在来剣術が行われていたのかについて現段階では史料上確認できないものの、在来剣術である示現流及び野太刀自顕流は明治 10 年前後に各地に創設された学舎において受け継がれることになる。

3. 大正期の鹿児島県小学校における剣術の実施

大正期の鹿児島県小学校における体育と剣術の実施内容に関しては、長崎及び三重県の視察復命書に紹介された山下尋常小学校の事例を中心に当日詳細に報告する。

まとめにかえて

大正期の鹿児島県の小学校において在来剣術が実施された背景には、幕末明治期にすでに軍事面及び教育面において剣術の位置が再強化されたことが挙げられる。示現流及び野太刀自顕流は、実戦性と教育性が相俟っていたからこそ、近代教育制度及び学舎教育に受け継がれたと言える。

¹ 本研究では、在来剣術の中でも主に示現流及び野太刀示現流を中心に明らかにする。示現流は東郷重位 (1561—1643) によって創始されたもので、慶長 9 (1604) 年には 18 代当主島津家久によって藩の剣術師範に取り立てられた。その後も代々の藩主に重用され、藩校造士館において行われるなど藩の武芸教育の中心を担っていたといえる。

一方、野太刀自顕流は安和元 (968) 年に鹿児島の総追捕使(警察的役割)として着任することになった大伴氏の末裔伴兼行が、大伴氏家伝の野太刀の業を伝えた事に始まるといわれている。そして、薬丸家 7 代兼武 (1775—1835) が、野太刀流から野太刀自顕流に流名を変更した。野太刀自顕流は、主として中下級武士によって行われ、郷中教育の中にも位置付けていた。野太刀自顕流は明治維新において活躍した流派であり、現在の鹿児島県でも「明治維新は薬丸流が叩き上げた」と言われている。

² 長崎縣内務部『菅外學事視察復命書』大正 4 年、三重縣内務部『縣外學事視察復命書輯録』大正 6 年

³ 前掲の二つの史料のなかで、視察員が目にした流派として示現流のみが明記されている。

⁴ 鹿児島には近世を通して郷中教育という独自の青少年教育組織が存在していた。郷中とは、一定の地理的区域を画して定められた方限を単位として構成され、そこに居住する中下級武士の子弟からなる集団あるいは集団の教育組織のことである。ここで行われていた青少年教育が郷中教育である。基本的に先輩が後輩を教育するというもので、各々の家を輪番で使用していた。特に、剣術は郷中教育の中核として位置付けており、各方限ごとに示現流あるいは野太刀自顕流という鹿児島藩独自の剣術が行われていた。

⁵ 三井原仙之助編『全国公立尋常中学校統計書』明治 32 年、富山房、p.149.

⁶ 近世の薩摩藩では藩の文武奨励、土風矯正の布達等は、番頭—組頭—小組頭へと伝達されていた。小組頭は実務の執行者であり、独自の裁量による奨励・取締りを推進することはなかったが、その一方で、組頭は一人で三、四の小組を束ねているため、小組の状況に目が届き、中間的立場から自己の裁量による方法で藩の意図・意向の実現を可能にしていた。(安藤保「郷中教育の完成 (上)」鹿児島大学教育学部『鹿児島大学教育学部 研究紀要 人文・社会科学編』44 巻、平成 4 年、pp.11-12.)

⁷ 鎌田正純『鎌田正純日記』島津家文書

⁸ 安藤保「郷中教育の完成 (上)」鹿児島大学教育学部『鹿児島大学教育学部 研究紀要 人文・社会科学編』44 巻、平成 4 年、pp.11-14.

⁹ 知政所、『舊記雜録追録、卷百七十九』辛未正月、島津家文書

¹⁰ 伊地知茂七「學制頒布前後十六ヵ年間 鹿児島縣教育の沿革」鹿児島縣教育會『鹿児島教育』學制頒布五十年記念號所収、大正 11 年 pp.63 - 65.

¹¹ 『鹿児島学校諸規則』明治 14 年 7 月、鹿児島県立図書館所蔵

「マスゲーム」の導入とその後

木下 秀明

目下『体操の近代日本史』を執筆している。これまで「マスゲーム」を発表したことはない。疑問事項を含めて要点を発表し、教示と批判とを仰ぎたい。

I. 明治神宮大会の「マスゲーム」導入とその後

1924年の第1回明治神宮競技大会準備委員会で、ホッケー担当の戸山学校教官大井浩はマスゲーム採用を主張した。しかし、賛成者はいなかった。

「マスゲーム」の初出は、1925年の第2回明治神宮競技大会であろう。大井の他に熱心な主張者も現れて、「マスゲーム部」が新設された。「マスゲーム」の位置づけは、大会種目一覧表の末尾であった。内務省は「本年はこの採点はやらないが成績次第で以後も盛んに之を行ひマッスゲームとして、採点する程度まで盛んにする」ことを意図していた（国民体育、11-11）。

小学校男子集団体操は東京市内と近隣の74校から6年生6400名、指導員160名を集めた。女子も78校から6400名を集めた。フィールドを埋め尽くした写真説明に「マスゲームの壮観」、記事中に「マスゲーム（団体競技）」「団体訓練を主眼とした体育運動」とある（朝日新聞）。中等学校男子は16校4900名を上級2学年から集めた。女子も35校から4900名を集めた。女子の服装は運動服か通学服であるが、「和服を妨げず」とある。

『第2回明治神宮競技大会報告書』（以下「2回報告書」）には「この大集団体操の壮観は、過去に行はれた旗体操等の余興的なものと異なり、正確なる体育運動として恐らくは日本最初」とある。以後、運動競技会では「殆どこの儘ともいふべき集団体操」が見られ、「マスゲーム」の名が知られることになる。

「マスゲーム部」は、1929年の第5回明治神宮体育大会で「体操部」と改称される。改称の論拠は、「マスゲーム」が事実上「集団体操」であること、最近では「集団的体操と個人的体操」の併用であること、オリンピックに「『ギムナスティック』の種目はあれども『マスゲーム』と称するものなし」であった。しかし、本音は1930年の全日本体操連盟創立に伴う1931年の第6回大会での体操競技使用を見込んでの改称ではなかろうか。

「体操部」は、1939年の第10回明治神宮国民体育大会から「集団体操部」と「体操競技部」に分割される。「マスゲーム部」の名称は復活しなかったが、報告書には「マスゲーム」の文字が見える。

II. 「マスゲーム」と“mass game”の関係

The Short Oxford English Dictionary (1933) と Britanica に “mass game” はない。ほとんどの英和辞典にも “mass game” はなさそうである。

外来語辞典では「マスゲーム」を和製英語としている。

百科事典類では、日本の「マスゲーム」を、欧米では “mass game” とは云わない。“mass clisthenics” あるいは “mass gymnastic display” に相当するとある。

以上から「マスゲーム」は和製英語と考えるのが妥当であろう。

しかし、2回報告書に、海外の競技会では「大集団の体育」が「マスゲームの名称の下」に行われるとある。

藤岡勝二編『大英和辞典』（15版1935年、初版1932年）には “mass game” があり、「団隊競技、マスゲーム」と訳している。

「マスゲーム」の提唱者である大井が独創したとは考えにくい（Ⅲ参照）。

したがって、「マスゲーム」は、1930年頃までの英語のカタカナ表記ではなかろうか。

読売新聞は、1932年ロスオリンピック大会12日目（8月10日）の「大スタジアム」における体操個人競技終了後の各国集団演技を「マスゲーム」と伝えた。「呼物のマスゲーム」の実質は「体操競技デモンストレーション」であって、各国ごとに30ないし40人で「体操其他の団体演技」を展開した。「日本独特のスポーツとしての武技」とあるが、日本人会300名が柔道の形と野試合を演じて人気を博した。

この催事名が"mass game"でないとすれば、記者はなぜ正式名でない「マスゲーム」を用いたのだろうか。英文のロス大会報告書か現地新聞を確認する必要がある。

Ⅲ. 大井浩の「マスゲーム」

『アルス運動大講座』（1926-1928年）の「マスゲーム」は1927年に刊行された。執筆者は、神宮大会でマスゲーム採用を主張した大井である。

大井は、1921年7月からスウェーデン駐在を経てフランス陸軍体操学校に滞在、1923年4月に帰国した戸山学校教官である。

大井は、「マスゲーム」の語意について「個々独立的運動である体操」を集団化して「指導者の号令や合図に依り同一運動を団体的に実施をし其出来栄を彼此比較する」ことを、集団の競技を意味する「マスゲーム」と呼ぶようになったと説明する。

同時に、マスゲームが「決して体操のみに限るものではなく他の之に類する運動の集団競技」をも包含することも指摘する。

このような認識に至った背景には、以下の在外研究での知見があった。

1) 9年前の1912年オリンピックの体操について

団体競技、個人競技、デモンストレーションの団体体操の区分があること

団体競技は、16人ないし40人が45分以内に演技する採点競技で、スウェーデン体操、特定の体操、任意の器械使用の体操の3種類に分かれること

個人競技は、ロープクライミングを含む4種類の器械体操の採点競技であること

デモンストレーションの団体体操は、持ち時間以外無制限の国単位であること

2) 1924年オリンピックの体操について

第5回ストックホルム大会のような採点する団体競技がないこと

デモンストレーションの団体体操で、ブック指揮のデンマーク体操等があったこと

3) ソコールについて

パリ在住チェコ人の夕方週2回の地味な日常的ソコール集会から感銘を受けたこと

これらの知見から「元来ゲームによって進歩せしむべき性質のものでない体操」が「相手を求めて所定の運動を競争」する「ギムナスチックゲーム」と、「団体の平素の訓練を一般観衆の前に展開」して競う「マスゲーム」とが生まれたとする。

Ⅳ. 「皇道主義」的体操

昭和になると、神道や武道を連想させる体操が現れる。この体操に合理性があるとは考えにくい。そこで、これらの体操の特質を、日本主義ではなく「皇道主義」ととらえる。

「皇道主義」という言葉は、日本主義や国粋主義が天皇や国体を根本義と主張することで実体の空虚さを糊塗する場合に用いた美名の類である。したがって、「皇道主義」の項

は、歴史、哲学、百科事典にはないようである。